

TEA（複線径路等至性アプローチ）における 記号概念の考察

——パース，ヴィゴツキー，ヴァルシナーを手がかりに——

宮 下 太 陽¹⁾・上 川 多恵子²⁾・サトウタツヤ³⁾

(立命館大学大学院人間科学研究科／株式会社日本総合研究所／未来社会価値研究所¹⁾・

立命館大学大学院人間科学研究科²⁾・

立命館大学総合心理学部³⁾)

本研究の目的は、文化心理学に立脚した方法論である TEA（複線径路等至性アプローチ）における記号とは何かという問いを明らかにすることを通じて TEA の理論的發展に寄与することである。本稿ではまず記号概念の歴史的文脈としてアウグスティヌスやソシュールの議論を踏まえた上で、ヴァルシナーに大きな影響を与えたパースの記号論について考察し、パースの哲学の基本となる第一性、第二性、第三性の考え方、及び記号、対象、解釈項の三項関係からなる記号概念を整理した。次にヴィゴツキーの記号の心理学とヴァルシナーの促進的記号を整理し、パースを含めた三者の記号概念を統合的に理解する枠組みとして、解釈項を頂点に主体—対象—記号が鼎立関係をなす記号の三角錐（sign triangular pyramid）を提示した。その上で、TEA を用いて研究を行う際に、カイロスの時間を明示的に取り入れたモデルである記号の三角錐（sign triangular pyramid）を分析の基本単位とすることが、ヴァルシナーが指摘する目的発生領域の掘り下げという TEA の今後の理論的課題にアプローチするための一つの足場かけ（スキャフォールディング）となりうることを示唆した。

キーワード：TEA，記号論，ヴィゴツキーの三角形，促進的記号，カイロスの時間，記号の三角錐
立命館人間科学研究，No.44，15-31，2022.

はじめに

現代における文化心理学の代表的理論家の一人であるヴァルシナー（Valsiner）は、文化についての不明瞭な概念を、記号的媒介というはるかに制限された概念に翻訳するという解法を見つけてから、文化心理学のアイデンティティが受け入れられるものになったと述べている（Valsiner 2007=2013）。こうした心理学と記号論の統合を踏まえ、ヴァルシナーは、文化とは

記号による調整（semiotic mediation）であると定義している（Valsiner 2017）。

ヴァルシナーの文化心理学は、主に社会に焦点化し、静的な視点で研究を行う比較文化心理学と対比すると、主に個人に焦点化し、動的な視点で研究を行うアプローチであると整理できる（Valsiner 2014）。その特徴は、第1に比較しなくても文化は理解可能だと考える点、第2に文化とともに変容していく人を捉える点にあり（木戸 2019）、記号論的文化心理学（Semiotic Cultural Psychology）と呼ぶことができる

(Valsiner 2014)。

では、記号論的文化心理学における記号とは何か。文化心理学に立脚した方法論である複雑経路等至性アプローチ（以下、TEA）において記号はどのように組み込まれているのか。これが本稿を貫く問いである。TEAは等至性(Equifinality)¹⁾の概念を、発達の・文化的事象に関する心理学研究に組み込んだヴァルシナーの創案に基づいて開発された質的研究法の一つである(安田 2019)。本稿は、文化とは記号による調整であるというヴァルシナーの定義を踏まえ、TEAにおいて記号をどのように概念化し、どのように理解すればより豊かになるかという視点から、記号概念の系譜をたどり、TEA研究の充実にとって少しでもふさわしい記号概念を構築していく試みである。

そもそも記号に関する学問の歴史は古く、古代ギリシアの哲学者アリストテレス(Aristoteles)に始まり、紀元前3世紀からローマ時代まで続くストア派や5世紀のキリスト教神学者アウグスティヌス(Augustinus)により体系化されたSemioticaに遡ることができる(サトウ 2019b)。

また、現代につながる記号の考え方は19世紀後半から20世紀初頭にかけてソシュール(Saussure 1857-1913)の記号学: semiologyとパース(Peirce 1839-1914)の記号論: semioticsによってほぼ同時期にそれぞれ独立に展開された(サトウ 2019b)。心理学における記号の歴史は比較的新しく、ロシアの心理学者ヴィゴツキー(Vygotsky 1896-1934)がその泰斗である(サトウ 2019a)。中村(2014)はヴィゴツキー心理学の本質は「人間の高次心理機能は言葉によって媒介されている」と捉える点にあると指摘している。ヴィゴツキーの記号概念は、人が他者や社会と接する時には、対象に対して直

接的に働きかけるのではなく記号を媒介した働きかけをすると考える点に特徴がある(木戸 2019)。言葉は代表的な記号であり、ヴィゴツキーは文化的道具(媒介手段)に着目して人間の行為をみることにより、その心的機能を理解していこうというアプローチで理論を発展させたといえる(上村 2000)。

ヴィゴツキー流の文化心理学の立場に立ち、記号についてよりダイナミックに人間のライフ(生命、生活、人生)との関係について考え、記号の考え方を深めたのがヴァルシナーである(サトウ 2019b)²⁾。TEAはヴァルシナー流の文化心理学の理論的基盤と共鳴し、人間をオープンシステム(open system)として捉え、非可逆的時間の流れの中で等至点(EFP)に至る多様な経路のありようを、歴史的・文化的・社会的な影響とともに捉えることを目的としている(安田 2019)。筆者らはこの歴史的・文化的・社会的な影響の捉え方に記号概念が大きく関わっていると考えている。ヴァルシナーがいう記号による調整は、TEAの中でどのように捉えることができるのか。それらを研究し、分析する方法としてTEAにおける記号概念を明瞭化するために、ヴァルシナーにいたる記号概念の歴史的な文脈をパースやヴィゴツキーに遡って整理するところから論を進める。

I. 記号概念の歴史的背景

ヴァルシナーは、自身の記号論を発展させる基盤としてパースの記号論を高く評価しており、ロサ(Rosa 2007)はパースの記号論の研究こそが、今日の文化心理学において大変重要であると指摘している。そこで本稿では、主にパースの記号論について—ヴァルシナーの文化心理学

1) 等至性とは、異なる人生や発達の経路を歩みながらも類似の結果にたどり着くことを示す概念である(安田 2019)。

2) ヴァルシナーはヴィゴツキーの原典を英語に翻訳し、英語圏にヴィゴツキーの研究を広く紹介したことで知られている。

との関連を考えるために必要な部分に限り一検討していく。本節ではまずパースの記号論を考えるための歴史的文脈について検討する。

記号論に関する研究を紐解くとアウグスティヌスにより体系化された Semiotica に遡ることができる。アウグスティヌスは聖書解釈学の基礎理論として記号 (羅: signum) の働きを検討する中で、「あらゆる教えは事柄が記号かに属するが、事柄は記号を通して学ばれる」と考え、アリストテレスやストア学派の記号論的伝統であった「記号表記」と「記号内容」から構成される二極関係に加えて、記号を受信する「解釈者」を第三極として加えた。アウグスティヌスにとって、聖書を正しく理解するためにはテキストに対する解釈者の真摯な態度、愛の実践による魂の浄化をめざす解釈者自身の純粋なまなざしが重要であった (須藤 2016)。

現代的な記号論は大まかに二つの学派に分れる³⁾。一つはパースを起源とするもので、もう一つはソシュールに端を発するものであり、後者は 20 世紀において支配的なアプローチとなった (de Waal 2013)。パースについては次節で詳しく述べるため、ここではソシュールの記号の考え方を整理する。ソシュールは言語学並びに記号学の創始者として知られているスイスの言語学者である。人間のコトバの最も重要な働きは、話し手から聞き手への意味の伝達であり、ソシュールは同じ言語を使っている人たちの間で、なぜ同じ意味が伝わるのかということを解明しようとした。そこで、ある言語についてそれを使う誰もが共有しているしくみを、ソシュールは「ラング」⁴⁾と呼び、ラングが共有されている

からこそ、言語がどんな状況で使われても、同じ意味が正しく伝達されるのだと考えた。ラングの単位である単語は音素と意味が結びついたものであり、単語というのは人間が知覚することができる対象によって意味を表す手段だと考えることができる。このような人間が知覚することができる図形や音などの対象によって意味を表す手段を、ソシュールは「記号」と呼び、単語についても人間が知覚できる音声という対象によって意味を表すため、記号の一種だとした (町田 2018)。

このようなことから、ソシュールは記号を「何かを意味するものである」と定義し、記号の性質として「シニフィアン (仏: signifiant) = 意味するもの = 記号表現」, 「シニフィエ (仏: signifié) = 意味されるもの = 記号内容」の二側面から考えることを提案した。ソシュールはラテン語の arbor の意味を調べる時であれ、あるいは「木」の概念を表すラテン語の単語を調べる時であれ、この言語で認められている関係だけが現実的に適合していると思われるものであり、それ以外の関係は、どんなものが想像できたとしても排除されるとしている (Saussure 1916=2016)。すなわち、ソシュールはシニフィアンとシニフィエは表裏一体 (どちらがどちらであるか分離できないもの) であり、これらの総体を「シーニュ (仏: signe) = 記号」と捉えていた (サトウ 2019b)。要約すればソシュールの記号論は言語記号の一般理論として検討されたものである⁵⁾。ソシュールの言語記号概念は、その後言語学や文芸評論の分野を中心に、ロマン・ヤコブソン (Roman Jakobson) やロラン・

3) ソシュール (ヨーロッパ系) やパース (アメリカ系) の流れとは別に、ロシアでは文学・文化研究者であるユーリー・ミハイロヴィチ・ロトマン (Yuri Mikhailovich Lotman) が主導したタルトゥ記号論学派の文化記号論が発展した (近藤 2005)。

4) ソシュールにとってラングを構成している最も大切な要素は単語であり、単語は意味と音が結びついた単位である。ラングは、単語を構成している要素や要素の間にある関係についての一群の規則

のことだと見なされている (町田 2018)。そしてその関係は根底的に恣意的 (arbitraire) な絆である (丸山 2012)。

5) ソシュールにとって記号表現である「木」は、その記号内容である「木」以外の関係を想定しないが、現実の世界では後述するケーラー (Köhler) の実験のように「木の棒」が「バナナを取る道具」に変わりうる。そのため、一般的な記号理解のためにはパースを理解する必要がある。

バルト (Roland Barthes) らによって発展的に継承されている。なお、ドゥ・ヴァール (de Waal) はパースとソシュールを対比する中で、ソシュールの記号概念は基本的に言語記号を念頭においた概念であり、本質的に二元論的であるため、原型をとどめないほどに変更することなしにはパース的な読み方をすることは不可能であると指摘している (de Waal 2013)⁶⁾。

Ⅱ. パースの記号論

チャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce) は、19 世紀にアメリカで活躍した哲学者、論理学者、数学者、科学者であり、同時期のアメリカで活躍した生理学者、心理学者、哲学者のウィリアム・ジェームズ (William James) とともにプラグマティズムの創始者としても知られている。パースの記号論として今日においてよく知られているのは、アイコン (類像)、インデックス (指標)、シンボル (symbol) という記号の三類型であるが、ヴァルシナーはパースの理論的遺産はそれだけにとどまらないより深い広がりがあると指摘している (Valsiner 2014)。そこで、まずはパースの記号論の射程を理解するため、パースが記号論に取り組んだ背景から整理する。

パースは博識で知られた人で研究領域は多岐に及んだが、その関心が哲学に向かうようになったのはカント (Kant) の『純粹理性批判』に触れたことがきっかけである。パースは「われわれが世界を構築する基本的な仕方」について、カントの理解に依拠してさらに前進させようと試みた

(Kuklick 2003=2020)。パースは哲学を三つの大きな部門に分けているが、その第一の部門が現象学であり、パースの哲学研究において最も基本となるものである。(CP5.121,1903⁷⁾)⁸⁾。現象学とは一般に現象界や現象する知についての哲学的理説であるが、パースにとっての現象学とは、「それが真実であるかどうかを追及せずに現れるものの目録を書き上げること (whose business it is simply to draw up an inventory of appearances without going into any investigation of their truth.)」である (CP2.120,1902:著者訳)。なお、現在において現象学といえばフッサール (Husserl) という印象を持つ読者も多いだろうが、フッサールが現象学という名称を採用した当時、ドイツの哲学界において現象学という名称は特殊なものではなく、ある程度一般的な用語としてフッサール以外の哲学者によっても用いられていた (谷 1998)。

さてパースは現象をファネロン (phaneron) と呼び、現象学をファネロンの記述であると定義している (CP1.284,1905)。パースにとってファネロンとは、実在の事物に対応するか否かに全く関係なく、どんな仕方においてであれまたはどんな意味においてであれ、心に現れるいっさいのものの総合的全体を意味する。パースはファネロンの構造をつかむための基本的要素として、三つの要素を提案しており (CP1.293,1894)、それがパースの哲学体系を貫くことになる、第一

6) ソシュールの記号学には解明の道具としての静態的分析装置である記号学と、既存の関係を乗り越え新しい関係 (意味づけ) をつくる道具としての弁証法を蔵した力動的装置である記号学がある (丸山 2012)。記号の動的な側面を捉えるアプローチはパースに通じる点もあるが、あくまでも記号学の対象を、言語がその主要な例である恣意的記号に限定し、自然的指標を除外した点でパースとは異なるといえる。

7) パースの引用については、先行研究にならい本の略語と引用箇所を特定する数字の組み合わせで記載し、さらにその年を追記する。CP5.121,1903 とは The Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol5 の 121 番目のメモであり、書かれたのは 1903 年だということ。

8) 第二の部門は規範科学、第三の部門は形而上学である。パースは、カントやヘーゲル (Hegel) にも依拠しつつ、哲学において特に三という数に傾倒していることを白状せざるを得ないと記しており (CP1.368,1890, CP1.369,1885)、実際の思索において三分法的分類をよく用いている。三項関係、もしくは鼎立構造に関心を寄せることがパースの特徴である。

性（firstness）、第二性（secondness）、第三性（thirdness）の分類である。

第一性（firstness）とは、「他の何ものにも関連することなく、あるがままに肯定的に存在するモード／ありよう（the mode of being of that which is such as it is, positively and without reference to anything else）」であり、第二性（secondness）とは、「どんな第三者とも関係なく、ひとつの第二者に関連してあるような存在のモード／ありよう（the mode of being of that which is such as it is, with respect to a second but regardless of any third）」である。そして、第三性（thirdness）とは「第二者を第三者と相互に関係させる、そのようなものとしての存在のモード／ありよう（the mode of being of that which is such as it is, in bringing a second and third into relation to each other）」と定義される（CP8.328,1904：著者訳）。

パースは第一性を性質（qualities）そのままの現われとして捉えており、他の何ものとも関係をもたずに、それ自体であるような何ものかであると述べている（CP2.85,1902）。また、パースは第二性を事実（fact）のあり方と捉え、ドアを開けるときの努力（と抵抗）を第二性の例としてあげたうえで、争闘（struggle）^{9）}こそ第二性の特徴であると述べている（CP1.322,1903）。第三性については、一般的、法則的、習慣的、条件法的なあり方として捉え、「第三性とは、絶対的なはじめとおわりの媒介または結合を意味する。はじめは第一、おわりは第二、中間は第三である。目的は第二、手段は第三である。寿命は第三であり、それを切り裂く運命は第二である。道の分岐点は第三であり、それは三つの道を想定している。真っ直ぐな道は、単に二つの場所をつなぐものとして見なされる場合は

第二であるが、中間の場所を通過することを意味する限り、それは第三である。・・・連続性はほぼ完全に第三性を表している。・・・行動は第二であるが、行為は第三である。（By the third, I mean the medium or connecting bond between the absolute first and last. The beginning is first, the end second, the middle third. The end is second, the means third. The thread of life is a third; the fate that snips it, its second. A fork in a road is a third, it supposes three ways; a straight road, considered merely as a connection between two places is second, but so far as it implies passing through intermediate places it is third. [...] Continuity represents Thirdness almost to perfection. [...] Action is second, but conduct is third.）」（CP1.337,1875：著者訳）と述べている。

そもそも、第一性、第二性、第三性はパースにとって、それ以上分解不可能な究極的な要素であり、いっさいの現象における基本的かつ普遍的な存在のありよう（mode of being）である。色について考えれば、「赤いりんご」の「赤」はりんごの表面に光があたった際、特定の波長の光のみが反射することでもたらされる物体色であり、この特定の波長は第一性である。ただし、これはあくまでも物理的に赤く見える可能性があるということに過ぎない。実際、例えば虹は日本においては七色だと考えられているが、実際に人によって見え方は異なるだろう^{10）}。これは見る人によって虹の光学的性質が変化するというのではなく、各人の知覚の問題である。このような個々の具体的現実の事実が第二性であり、パースの言う事実とは作用と反作用、刺激と反応、努力と抵抗など、二つのものの間の純粹に二極的な関係である。色における第三性は色の記号化である。例えば、明治時代の日本に

9) 争闘とはいかなる種類の第三性または媒介とも関係なく、また特に行為のいかなる法則にも関わらず、ただ二つのものの間の相互行動を意味する（CP1.322,1903：米盛訳 1985）。

10) 国によっても虹の色の数は異なっており、アメリカ・イギリスでは六色とされている。

は肉色¹¹⁾という色があった。ある物体 A はその第一性として、ある色を呈している。明治時代人 B は、ある色をみて、第二性として肉色だと感じている。そして、「さっき肉色の物体を見たよ」と同時代人 C に伝える。すると、本来第一性と第二性として現れている明治時代人 B がどのような色をみているのかが、同時代人 C に伝わる。人が色を感じることに付いての性質を抽象的に概念化＝記号化した結果である¹²⁾。そしてこの色の記号化は、時間的、空間的に限られた範囲の中で、社会と歴史のせめぎ合いの結果として定着化してきたものである¹³⁾。

パースは第三性を現わす観念の中で、もっとも理解しやすくかつ哲学的に興味があるものとして、記号を取り上げ、「それ（記号）が表象するものは、その記号の対象と呼ばれ、記号が伝達するものはその記号の意味と呼ばれ、記号を創出する考えはその記号の解釈項と呼ばれる。（That for which it stands is called its *object*; that which it conveys, its *meaning*; and the idea to which it gives rise, its *interpretant*.)」(CP1.339,1895：著者訳)と述べている。なお表象とは何かの代わりをすること、意味とは記号が表す内容のこと、解釈項とは記号が作り出す効果のことを指す。

パースの記号論の研究¹⁴⁾は、本人自身が、「私が記号論と呼んでいるものを明らかにし、切り開こうとした開拓者、あるいはその奥地に入り

込んだだけのものであり、・・・初めて来る人には、その領域は広大すぎ、その仕事は遠大すぎる。（a pioneer, or rather a backwoodsman, in the work of clearing and opening up what I call semiotic, [...] and I find the field too vast, the labor too great, for a first-comer.）(EP2:413,1907：著者訳)」と書き記しているように、完成されたものではなく、内容も不明瞭で首尾一貫していないところも多いと指摘されているが（内田1986¹⁵⁾；Engeström 1987）、議論の骨子が前述の通り三分法的分類で貫かれているため、構造としては整理されている。遅ればせながら、パースによる記号の定義を見ていこう。

まずパースは記号について、「記号、あるいは表象体とは、何らかの観点や何らかの能力で、誰かに向かって何かを示すものである。記号は誰かに語りかけるもの、つまり、その人の心の中に、同等の記号、あるいはより発展した記号を作り出すものである。もとの記号が作り出すそのような記号を、私は最初の記号の解釈項と呼ぶ。記号はあるもの、つまりその対象を表すものである。（A sign, or representamen, is something which stands to somebody for something in some respect or capacity. It addresses somebody, that is, creates in the mind of that person an equivalent sign, or perhaps a more developed sign. That sign which it creates I call the interpretant of the first sign. The sign stands for something, its object.）」(CP2.228,1897：著者訳)と定義しており、記号現象が三つの構成要素からなることを示している。すなわち、記号、対象、解釈項である。この点について、パースはウィリアム・ジェームズに宛てた手紙の中で、以下のような定義を与えている。

「記号とは、一方では、対象と呼ばれるそれ自身とは別の何かによって規定される（すなわち、

11) 黄色をおびた淡紅色。

12) なお、明治時代の肉色は昭和後半期において肌色と呼ばれていたが、現在はいすだいいしくはパールオレンジと呼ばれており、令和に育つ子ども達には肉色も肌色も伝わらないことになる。

13) 最近では、色覚の特性により、それが障害をもたらす場合があるという事実を周知し、色覚障害者の色の世界を理解した上で、社会による支援の在り方を考えるべきであるとの立場から、色覚を考慮したユニバーサルデザインの提案などの動きが広がっている。

14) パースは、記号論を哲学の第二部門である規範科学のうち、論理学のすべてを含むものとして捉えている。（de Waal 2013）。

15) パース著作集2の序を参照。

特化された、決められた）認識可能なものである。・・・他方では、実際的にもしくは潜在的な心を規定するものであり、その規定を私は記号によって作られた解釈項と呼ぶが、その解釈する心は対象によって媒介的に規定されている。（A Sign is a Cognizable that, on the one hand, is so determined (i.e., specialized, bestimmt¹⁶⁾) by something other than itself, called its Object [...] while, on the other hand, it so determines some actual or potential Mind, the determination whereof I term the Interpretant created by the Sign, that that Interpreting Mind is therein determined mediately by the Object.）」（EP2:492,1909：著者訳）

またパースは記号と記号の関係について、「記号が結合すれば、それがどのような仕方であれ、結果として生じるシステムは一つの記号を構成する。（if any signs are connected, no matter how, the resulting system constitutes one sign.）」（de Waal, 2013：著者訳）と述べている。パースは記号、対象、解釈項について、それぞれさらに詳細な分類を行っているが、本稿では対象と解釈項との関係において、パースが記号を三つに分類して整理している点に着目する。

パースによれば、記号は三つの三分法によって整理できる（CP2.243,1903）。第一の分類は記

号そのものが単なる質（質記号：qualisign）であるか、現実存在（事物記号：sinsign）、一般法則（法記号：legisign）であるかによるものである。第二の分類は、記号とその対象との関係の本質が、記号が自分自身の中にある特性を持っていることにあるのか（アイコン：icon）、その対象とのある実在的な関係にあるのか（インデックス：index）、解釈項との関係にあるのか（シンボル：symbol）によるものである。第三の分類は、解釈項がそれを可能性の記号（レーム：rheme）として表象するのか、事実の記号（ディーケント：dicent）として表象するのか、理性の記号（議論：argument）として表象するのかによるものである。ドゥ・ヴァールはパースの記号の三分類について、表1の通り簡潔にまとめている。

第一の分類の分かりやすい事例として、音楽の交響曲を思い浮かべると、交響曲を構造（structure）で考えた場合は法記号であるが、実際の演奏（actual performance）は事物記号であり、一音一音の美的効果（aesthetic effect）は質記号といえる（de Waal 2013）。

第二の分類の事例としては、天気図を思い浮かべると理解しやすい。日本列島の形はアイコンであり、気圧の具体的な数値はインデックスであり、気圧の高低を表す「高」や「低」といっ

表1 記号の三分類（de Waal, 2013）

	1	2	3
1 現れ方において記号は：	単なる質として ＜質記号＞	現実存在として ＜事物記号＞	タイプあるいは一般的 法則として＜法記号＞
2 対象との関係において記号は：	それ自身（対象）の 性質を持つ ＜アイコン＞	対象と実在的關係を 持つ ＜インデックス＞	解釈項によって対象と 關係を持つ ＜シンボル＞
3 解釈項に及ぼす 影響において記号は：	可能性の記号として ＜レーム＞	事実性の記号として ＜ディーケント＞	理性の記号として ＜議論＞

16) bestimmt はドイツ語で「確か、決定」などを意味する。

た表記はシンボルである（田沼 2007）。

第三の分類については、論理学における古典的区別である名辞（term）、命題（proposition）、議論（argument）に依拠しており、パースによれば、レームは人間の道徳性のような真でも偽でもない任意の記号であり、ディーケントは主張することができる記号であり、議論は思考あるいは記号群における変化のプロセスを表象していて、あたかもこの変化が解釈者において誘発されているかのように、自己制御を通じてその解釈者に働きかける形式を持つ記号である（de Waal 2013）。以上の整理を踏まえ、パースの分類についてももう少し例を挙げると、例えば漠然とした恐怖の感覚はレーム的でアイコン的な質記号であり、犬が吠える声は予期せぬ訪問者を想像させるレーム的でインデックス的な事物記号であり、ダーウィン（Darwin）の『種の起原（On the Origin of Species）』は、進化の原理の論理的でシンボリックな法記号といえる（de Waal 2013）。

ここまで、パースの記号の分類について全体像を整理してきたが、パースは記号の分類と併せて、記号作用についても詳細な分析を行っており、記号が作り出す効果である解釈項について2つの観点から整理している。

パースはまず記号と解釈項の關係に着目して、直接的（immediate）解釈項、力動的（dynamic）解釈項、最終的（final）解釈項を区別している（CP8.315,1909）。直接的解釈項とは、あるものが一定の記号となるならば必然的にそれに伴う解釈項であり、力動的解釈項とは、ある任意の解釈者に対して任意の機会にその記号を使った考察の任意の段階で生み出される現実的效果である。最終的解釈項とは、諸環境がその記号に完全な効果を発揮させることを仮に許すとすれば、任意の心にその記号が作り出すだろう効果であり、またもし記号が十分に考察されるならば、いかなる解釈者もそれに至ることが運命づ

けられている一つの解釈的な結果であるとされている（de Waal 2013）。

次にパースは、結果として生じる解釈項のタイプの違いによる分類において、情動的（emotional）解釈項、活動的（energetic）解釈項、論理的（logical）解釈項を区別し、情動的解釈項は記号によって生み出された感覚であり、活動的解釈項はひとつの個別的な行為であり、論理的解釈項は思考あるいは他の一般的記号、あるいは形成または修正された習慣であるとしている（CP5.475, 476,1907）。

パースによれば、論理的解釈項は活動的解釈項の生み出す効果であるが、それと全く同じ意味で活動的解釈項も、情動的解釈項の生み出す効果である（CP5.486,1907）。たとえば、子どもが突然路地から飛び出すのを見た車の運転手は恐怖の感覚を経験（情動的）するが、それがブレーキを踏むという行為を結果として生み出し（活動的）、それらすべての結果として、住宅街で運転するときには注意しなければならないという理解（論理的）が生まれる。

パースは前述の通り、論理的解釈項の本質を習慣だと捉えているが（CP5.486,1907）、習慣については、「与えられた状況下で、与えられた動機によって作動したときに、一定の仕方で行動する準備ができていることが習慣であり、意図的な、あるいは自制心のある習慣は、まさに信念である。（[Readiness] to act in a certain way under given circumstances and when actuated by a given motive is a habit; and a deliberate, or self-controlled, habit is precisely a belief.）」と述べている（CP5.480,1907：著者訳）。

先に取り上げた車のブレーキの例のように、パースは「最初の論理的解釈項はわれわれを刺激して内的な世界において様々な自発的な行為を行わせる。われわれは多様な状況にあつて様々な動機によって動かされている自分を想像し、予想がわれわれに開かれたままにしているだろ

う代わりの方針をたどりながら進む。さらには、同じような内的活動によって、われわれの予想を少しでも修正できる様々な方法に気づくように導かれるのである。(first logical interpretants stimulate us to various voluntary performances in the inner world. We imagine ourselves in various situations and animated by various motives; and we proceed to trace out the alternative lines of conduct which the conjectures would leave open to us. We are, moreover led, by the same inward activity, to remark different ways in which our conjectures could be slightly modified.)」(CP5.481,1907: 著者訳)と述べている。その意味において、論理的解釈項は未来性時制で表さなければならず、その未来時制は「であろう」という条件法となる (CP5.482,1907)。

なお、十分に習慣化した論理的解釈項が信念であるとは既に述べた通りだが、このとき信念のレベルに達している論理的解釈項は最終的解釈項と同義だと考えてよいだろう。パースの記号論をまとめておけば、パースの議論の焦点は記号が記号として成立しているありようを記号、対象、解釈項の鼎立関係として描きだすことにあったといえる。そして記号が新たな記号を生み出す過程を記号過程 (semiosis) として捉え、その具体的なプロセスを明らかにするために、記号、対象、解釈項について様々な下位分類を整備したといえる¹⁷⁾。

以上がパースの記号論の簡単な素描である。パース自身は哲学の第一の部門である現象学、第二の部門である規範科学（特に論理学としての記号学）を踏まえ、哲学の第三の部門である

形而上学へと思想を展開させ、プラグマティズム¹⁸⁾を発展させていくことになる。

次節では心理学における記号概念について整理していく。

Ⅲ. 心理学における記号： ヴィゴツキー、ヴァルシナー

1. ヴィゴツキーの記号概念

心理学において最初に記号に注目したのはロシアの心理学者レフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキー (Лев Семёнович Выготский/Lev Semyonovich Vygotsky) である。ヴィゴツキーの記号概念を理解するために、ヴィゴツキーが自らの「文化－歴史的発達理論」を構築する過程で影響を受けたケーラーのチンパンジーの実験 (中村1992) について触れておく。ケーラーはドイツの心理学者でゲシュタルト心理学の創始者の一人として知られており、チンパンジーの知性の程度を調べるため、実験的環境におけるチンパンジーの道具の使用・制作を観察するという手法で一連の実験を行った。チンパンジーが天井からぶら下がっているバナナを取ろうとすると、まずチンパンジーはジャンプして取ろうとするなどの試行錯誤学習を行った上で、それでも取れない場合は箱を踏み台にして木の棒を使ってバナナを手に入れようとする。こうしたひらめきをケーラーは洞察 (insight) と呼び、洞察が可能になる条件として形・構造・関係といった全体構造 (ゲシュタルト)¹⁹⁾の把握を挙げた (Köhler 1921=1962)。

このような全体構造の把握が重要となる洞察

17) パースは記号の三つの三分類の他、六通りの三分類に基づく二十八分類表や、十通りの三分類に基づく六十六分類表までも考案した。ここでパースがしようとしていたことは、記号論に対して、メンデレーエフ (Mendeleev) の周期律表のようなものを作り上げることである (de Waal 2013)。

18) プラグマティズムとは、事物に関する何らかの真理を決定しようとする試みではなく (CP5.464,1907)、知的概念 (intellectual concepts) の意味を確定する方法である (CP5.467,1907)。

19) ゲシュタルトとは、「体制化された構造」や「要素に還元できない、一つの全体がもつ構造特性」を意味するドイツ語で、単なる集合体や総和とは区別されるべきものである。

学習は文化とどのように関連するのであろうか。サトウ (2019b) は、道具を用いることは、あるものをそのものの自体として使用する (自然に任せる) のではなく、あるものを他のものとして使う (人工的に使用する) ということであり、記号の作用であるともいえ、だからこそ文化の始まりになると指摘している。

ヴィゴツキーの「記号の心理学」はヴィゴツキーの三角形という主体・対象・記号からなる概念図で説明される (木戸 2019)。ヴィゴツキーは、複雑な心理過程全体を分析する方法として、分析される全体とは全く異質な産物である「要素」に分解する方法を批判した上で、全体に固有な基本的特質のすべてをそなえ、それ以上は分解できないような産物である「単位」を分析する必要性を主張した (Выготский, 1934=2001)。ヴィゴツキーにとって、この主体・対象・記号からなる三角形こそが分析の最小単位であり、記号は主体と対象の間に媒介物としておかれている (神谷 2006)。

中村 (1997) によると、ヴィゴツキーは、道具を媒介にした自然と人間の関係というマルクス主義の基本思想に基づいて発想し、心理的道具としての記号 (言葉) を媒介にした人間自身の行動の支配という自らの構想の練り上げに専心したという。ヴィゴツキーは子どもの思考の発達について、個人的なものから社会化されたものではなく、社会的なものから個人的なものへ進むと結論づけた (Выготский 1934=2001)。こうした外言から内言への移行過程について、ヴィゴツキーは周囲の社会的現実との唯一無二の独特な関係 (発達の社会的状況) が子どもの生活様式や存在様式を決定していると考えていた (中村 2014)。

木戸 (2019) は、おもに二者間あるいは小さな集団のために用いられていたヴィゴツキーの三角形の基本的枠組みを応用し拡張するところから、現代の文化心理学のアプローチが生まれ、その最大の特徴は刺激に対する反応として

の行動ではなく、社会・文化的な文脈や状況の中での「行為」に着目することにあると指摘している。なお、この三角形の基本的枠組みは構造であり、時間を読み取ることは不可能ではないが、時間が明示的に取り入れられているわけではない。

2. ヴァルシナーの促進的記号

ヴァルシナーの記号論の特徴は、記号を考える際に時間を取り入れ、心理的プロセスとしての記号過程を重視していることにある (サトウ 2019b)。人が記号と向き合うのは「いま=現在」にほかならず、そのことは過去と未来から現在を峻別することであり、また、過去と未来を架橋する (橋渡しする) ことにほかならないのである。この指摘は、「いま=現在」が時計の計測に依拠するクロノス (Chronos) 的時間ではなく、カイロス (Kairos) 的時間であることも示唆している²⁰⁾。カイロスの時間においては、「いま」という時間の幅が、人生の意味づけとの兼ね合いで一日千秋にもなれば十年一日にもなりうる。

ヴァルシナーは、2018年5月に立命館大学大学院人間科学研究科 (於: 立命館大学 OIC) で講義した際に、記号が人に作用することを重視する観点から、記号を「未来と向き合う何らかの機能を持ち、過去の状態から何か新しいことへと導く何か」とであると定義した (サトウ 2019b)。これは、パースの解釈項 (記号が作り出す効果) を、より積極的に人への影響という観点から定義し直したものといえるだろう。パースは、「記号はそれ自身をより完全に発展した別の記号に翻訳しない限りは記号ではない。 (a sign is not a sign unless it translates itself into

20) 神学者・ティリヒ (Tillich 1886-1965) は、ギリシア神話に出てくる二人の「時の神」の名前を使って時間の二つの側面を指摘した。一つは物理的な時間の流れで、時計で計測できるクロノスであり、もう一つは人が感じる意義深い質的な時間の流れで、時計時間とは異なる質的な時間としてのカイロスである (サトウ 2019c)。

another sign in which it is more fully developed.)」(CP5.594.1903：著者訳)として、解釈項はそれ自身が記号であり、記号の効果はつねにもうひとつの記号となり無限に続く記号過程の原理であると述べている。こうした記述はパースの関心が人や心理よりも記号そのものにあることによる必然的な帰結であろう。一方でヴァルシナーは彼の記号論の特徴を、時間の流れの中で人を何か新しいことへ導く作用に重点をおく必要があると考え、促進的記号 (promoter sign)²¹⁾ という概念を提示したのである (Valsiner 2004)。ヴァルシナーによれば、あらゆる記号的媒介は促進的記号として機能するのであり、人間にとっての未来を志向する時間を拡張し、さまざまな未来の可能性を構築するガイドとして作用する (Valsiner 2007=2013)。ここに記号という概念と刺激という概念の分水嶺がある。刺激とは感覚器を通して生活体に受容され、行動の基礎となる情報を形成する外界の事物またはエネルギーをさし、心理学においては刺激と反応の二項関係として処理されるものとして概念化されており、パースの分類では第二性に属する。一方、記号概念は既に述べた通り、記号、対象、解釈項の三項関係が基本であり、どの項が欠けてもその作用は雲散霧消してしまうような第三性に属するものである。

3. 文化という概念

「はじめに」で既に述べたように、ヴァルシナーは人と記号との相互作用、すなわち記号による調整こそが文化であると定義しているが (Valsiner 2017)、ヴァルシナーの文化概念の特徴を捉えるために、ここで改めて文化の定義について整理

してみたい。西川 (2001) によれば、「文化」の概念は、18 世紀末から 19 世紀にかけて、とりわけドイツにおいて発展し深められた概念であり、もともとは「住む」「耕作する」「守る」「尊敬する」といった一連の意味を持つラテン語の *coler* から派生した名詞である *cultura* に由来する。ドイツにおける文化概念の歴史を考察した文化人類学者のクローバーとクラックホーンは 160 以上に及ぶ文化の定義を検討した上で、以下の通り文化の定義を提案している (Kroeber & Kluckhohn 1952)²²⁾。

「文化は、シンボルによって獲得される行動の、または行動のための様式 (パターン) から成り、人間の諸集団の特有の業績を構成し、人工物として具体化されたものを含んでいる。したがって文化の本質的な核心は、伝統的な (すなわち歴史に由来し、歴史的に選択された) 諸観念、とりわけその諸観念に付着した諸価値から成る」(西川訳²³⁾ 2001)。

また厚い記述 (thick description)²⁴⁾ の提唱者として有名な文化人類学者のギアーツは、下記のような文化概念を提示している。

「文化は、象徴に表現される意味のパターン (pattern of meanings) で、歴史的に伝承されるものであり、人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展のために用いる、象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系を表している」(Geertz 1973=1987)。ギアーツにとって、文化とは人間の外に実在するものであり、人間は文化を通して完成する存在である。そのため、文化とは人間の精神や心に内在するもの

21) ヴァルシナーは人の行動を促進する促進的記号とは逆に、人の行動を抑制する記号を抑制的記号 (inhibitor sign) として概念化している (サトウ 2019b)。抑制的記号も、未来に導く記号という点では促進的記号と同じであり、両者は相補的なものといえる。

22) 本書は 4 部構成であり、第 1 部が故西川長夫教授のゼミにより立命館国際研究 (1991) に訳出されている。

23) 西川 (2001) 「増補国境の超え方」に引用されている。

24) フィールドへの参与を通じて見出した諸事情を、行動そのものだけではなく、具体的な場面、状況、文脈の中に生じた出来事として詳細に記述すること。

であるといったような心理主義的な立場を明確に否定している (Geertz 1973=1987)。

一方、ヴァルシナーは、文化を実在としてではなく生成プロセスとして扱い、人間の心理的システム内において文化が機能するという見方を取り、心的プロセスに内在する文化のダイナミックでプロセス的な性質を強調する (Valsiner 2007=2013)。これを受けて木戸 (2019) は、ヴァルシナー流の文化心理学の特徴を、比較文化心理学との差異を念頭に、「文化が人に属する (文化が人に寄り添う) (Valsiner 2001)」と考えることにあるとし、複数の文化が記号を介して人に属すると指摘している。

4. 文化心理学における記号モデル

ここでは、これまでに述べてきたパース、ヴィゴツキー、ヴァルシナーの記号論のつながりを統合的に考えていきたい。

パースの三角形とヴィゴツキーの三角形は、三項のうち記号と対象という二項が一致している。しかしあと一つは、解釈項 (パース)、主体 (ヴィゴツキー) となっており別のものである。そもそもパースの起点は記号であるのに対し、ヴィゴツキーの起点は主体であり、この違いが記号現象そのものに関心を置く記号論と人を起点とする心理学の違いを反映しているといえる。とはいえ、記号と対象とその関係については両者で一致しているため、まず記号と対象の関係を共有する形で2つの三角形を1つの辺を共有するように描くことができる (図1)。

パースの三角形とヴィゴツキーの三角形を単純に統合した図1は四角形となり、主体と解釈項が対称的なものであるように見え、あまつさえ対立的にさえ見えてしまう。そこで、主体と解釈項を対立的に表さないための工夫として、ヴァルシナーがパースとヴィゴツキーの考えを発展的に取り入れ、文化を人と記号との相互作用、すなわち記号による調整と捉えて文化心

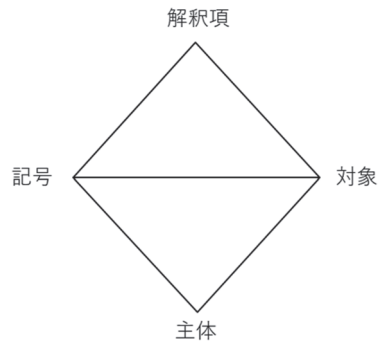


図1 パースの三角形とヴィゴツキーの三角形の統合

理学を構築したことを念頭に、三者の記号論を統合的に三次元で表現することを考える。

パースは記号と対象の媒介として解釈項をおいたが、人を起点とする心理学では、主体と記号の媒介 (例えばコミュニケーション²⁵⁾) や、主体と対象の媒介 (例えば道具の目的外使用) としても解釈項が立ち現れる²⁶⁾。そこで図1の下半分の三角形を平面とし、解釈項を三次元的に起こすことにより、三角錐として立体的にとらえることができる (図2左図)。なお、図2 (左図) は人を起点とするヴィゴツキーの三角形を軸に展開すると図2 (右図) のように描ける。

パースの記号概念やヴィゴツキーの三角形はスタティック (static) な構造を示す平面的 (二次元的) なモデルであり²⁷⁾、時間概念を内包するダイナミック (dynamic) なヴァルシナーの促進的記号と接合することが困難であったが、記号モデルを立体的 (三次元的) に考えることで記号の発生について動的な現象として表現する

25) コミュニケーションとは言語・非言語を含むシンボルを用いたメッセージや情報のやり取りで、意味の生成および再構築を指す。

26) コミュニケーションについては、中国人日本語学習者における敬語使用の意識変容などがそれにあたる (上川 2017)。また道具については、本稿で述べたケーラーの実験において木の棒がバナナを取る道具になるような事態が該当する。

27) パースとヴィゴツキーの記号概念をスタティックと表現してしまうと様々な反論もありえるだろうが、ここではヴァルシナーのダイナミックな記号概念とあえて対比させた。

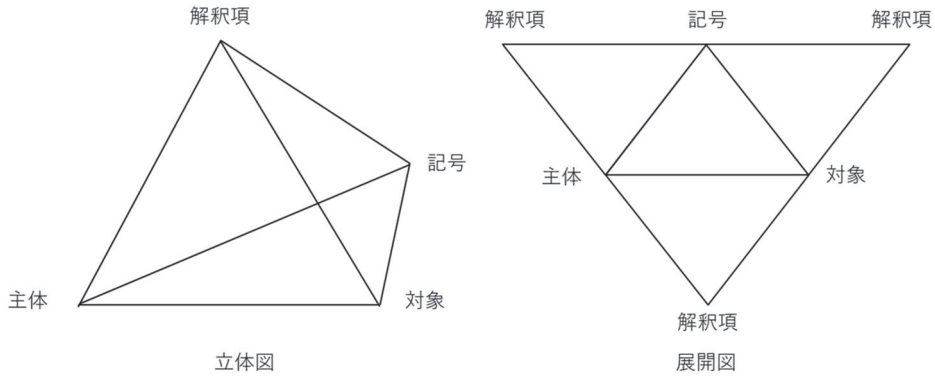


図2 パース、ヴィゴツキー、ヴァルシナーの記号論の統合的理解

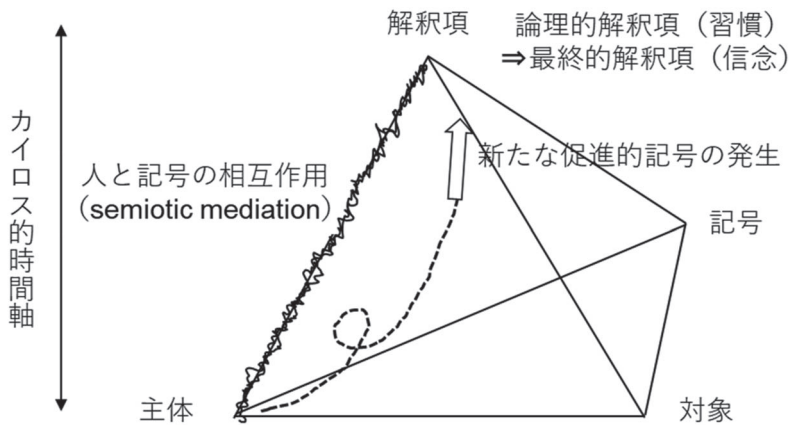


図3 記号の三角錐 (sign triangular pyramid)

可能性が生まれた。

記号モデルを動的に考えることで、パースの解釈項が人の心に作り出す効果やヴィゴツキーの外言から内言への移行も文化心理学の記号論的枠組みで理解することができる。またヴァルシナーの言う促進的記号が新しく発生した場合は、人と記号の相互作用が新たに発生することになる。そこで、文化心理学の記号概念の基本単位として、図2をもとに新たな概念図（図3）を提示し「記号の三角錐 (sign triangular pyramid)」と呼ぶことにする。

ここで、解釈項と主体の間の線を直線ではなく、ジグザグ線としているのは、新たな促進的記号の発生により、カイロスの時間が動き出し、

人と記号の相互作用のせめぎ合いが起っていることを現している。図3では時間の次元をカイロスの時間軸として描くことでヴィゴツキーの三角形と比べてより時間概念を明示的に取り込んでいる点を強調しておきたい。時間概念を取り込み、解釈項を頂点として立体的にモデル化することで、解釈項（記号が作り出す効果）が時間の流れとともに変容するという視点を明確に持つことができ、記号現象を理解する理論モデルとして柔軟性と広がりを持つことができる。

また、記号現象と向き合う研究者にとっては、図3の表現を文字通り多面的に活用することで、パースやヴィゴツキーの三角形では立ち現れ

ない、主体と記号や、主体と対象の媒介としての解釈項についても理論モデルの中で想定できるようになる。理論的な枠組みが拡張することで、人と記号の相互作用を分析する際に、研究の焦点のあて方に自由度が増す。これは記号現象を分析する理論モデルとして、記号の三角錐 (sign triangular pyramid) が持つ射程の広さと汎用性の高さを示している。

おわりに：TEA における記号

本稿では、文化心理学に立脚した方法論である TEA において記号をどのように概念化しどのように理解すればよいか、という問題意識のもと、よりふさわしい記号概念を構築することを目指し、パースの記号論を足掛かりに、ヴィゴツキーの三角形、ヴァルシナーの促進的記号について論じていく中で、三者の記号概念の統合的概念図 (記号の三角錐：sign triangular pyramid) を提示した。

TEA の特徴は等至性の概念を核として、時間経過とともにある人間の文化化の過程を記述することにある (安田 2019)。ヴァルシナーは TEA について、(1) 非可逆的時間の次元と、(2) 実現していることとしていないことという次元を用いて人生を描くところに特徴があり、実現しなかった径路も描くことで、さまざまな可能性の中からシステムがその径路 (例：個人の人生) を構成していること、その構成プロセスには周囲の人々や状況 (広い意味での文化) が、関与していることを描くことができる方法論であると定義している (Valsiner 2017)。

本稿のここまでの整理を踏まえ、人と記号との相互作用に着目して TEA を理解するならば、TEA とは非可逆的な時間経過の中で、等至点にいたるまでの人と記号との相互作用過程を実存的に記述する方法であるといえる。

デ・ルカ・ピチオーネ (De Luca Picione) は、

記号の使用は何かを参照したり指し示したり、コード化された形でメッセージを伝えるだけではなく、考え、行動し、経験を共有するために世界のモデルを作成することであり、広範な記号論のプロセス (類像的, 指標的, 象徴的) によって、それぞれの生物は独自の世界を創造していると指摘している (De Luca Picione 2020)。またサトウ (2017) は、生物は記号を用いることで、「いま・ここ」、に縛られないコミュニケーションが可能になると指摘し、生物としてのヒトは、記号の交換を通じて外界とコミュニケーションを行なうという意味でオープンシステムであると論じている。

TEA とはこのようなオープンシステムである人の「経験」を研究対象として、過程性と実存性に重きをおいて研究する手法²⁸⁾である (サトウ 2019d)。TEA における記号とは、オープンシステムである人が外界とのコミュニケーションを行う際の媒介になるものであり、歴史的・文化的・社会的な影響を分析するための概念である。そして、非可逆的時間の流れの中で、カイロスの時間としての「いま・ここ」で起こっているありようを分析する際の基本単位が、本稿で提示した記号の三角錐 (sign triangular pyramid) であるといえる。

ヴァルシナーは、2019 年 9 月の日本質的心理学会 (於：明治学院大学) の講演で、拡張する現在 (extending present) において、歴史的・文化的・社会的な力がせめぎ合っている目的発生領域 (TELEOGENETIC Zone) のありようを深く掘り下げることが、TEA の次なる理論的課題であると指摘した (Valsiner 2019)。目的発生領域が生じるのは、人生における径路の分岐領域であり、TEA では等至点と対になる形で分

28) サトウ (2019d) は質的研究法について構造・過程軸と実存性・理念性軸の 2 軸で捉え、各方法論を 4 象限でマッピングすることを提唱した。

岐点²⁹⁾として概念化されている(安田 2015)。ヴァルシナーによれば、そこでは過去(これまで)と未来(これから)、実現する可能性と、実現しない可能性との間で緊張関係が生じており、分岐点における緊張と現象の変容のプロセスを非可逆的時間のリアリティの中で分析することが、TEA 研究の意義の一つであると指摘している(Valsiner 2018)。本稿で提示した記号の三角錐(sign triangular pyramid)が、ヴァルシナーが指摘する理論的課題にアプローチするための一つの足場かけ(スキヤフォールディング)として貢献できれば幸いである。

なお、TEA では人の「経験」を研究対象として、多様な径路をモデリングするための具体的な手法としてTEM(複線径路等至性モデリング)が用意されている(安田 2019)。TEMを用いて、人生における径路の分岐領域を深く掘り下げて分析していく上で、本稿で示した記号概念がデータを理解する際にどのように役に立つのか、またTEMの既存の諸概念にどのような理論的増分をもたらすのかなど、具体的な分析を視野に入れた理論的考察については今後の検討課題としたい。

引用文献

- Выготский, Л. С. (1934 / 2001) Мышление и речь / Л. С. Выготский, Мышление и речь, М., Лабиринт. ヴィゴツキー, Л. С.・柴田義松(訳)(2001) 思考と言語. 新読書社.
- De Luca Picione, R. (2020) The Semiotic Paradigm in Psychology. A Mature Weltanschauung for the Definition of Semiotic Mind. Integrative Psychological and Behavioral Science. (2020 年 6 月 10 日 取得 <https://doi.org/10.1007/s12124-020-09555-y>).
- de Waal, C. (2013) *Peirce: A Guide for the Perplexed*. Bloomsbury Academic.
- Engeström, Y. (1987) *Learning by Expanding: An Activity-Theoretical Approach to Developmental Research*. NY: Cambridge University Press.
- Geertz, C. (1973) *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*. New York: Basic Books. ギャーツ, C.・吉田禎吾・中牧弘允・柳川啓一・板橋作美(訳)(1987) 文化の解釈学. 岩波書店.
- 上川多恵子(2017) 中国人日本語学習者の敬語使用. 安田裕子・サトウタツヤ(編) TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する. 誠信書房, 第1章, 第1節, 26-48.
- 神谷英司(2006) ヴィゴツキー理論の発展とその時期区分について(Ⅱ). 社会福祉学部論集, 2, 15-30.
- 木戸彩恵(2019) 文化心理学の歴史. 木戸彩恵・サトウタツヤ(編) 文化心理学——理論・各論・方法論. ちとせプレス, 第1章, 3-13.
- 近藤喜重郎(2005) タルトゥ学派の文化記号論(ノートと翻訳). 文明研究, 23・24, 53-61.
- Köhler, W. (1921) *Intelligenzprüfungen an Menschenaffen*. Berlin: Springer. ケーラー, W.・宮孝一(訳)(1962) 類人猿の知恵試験. 岩波書店.
- Kuklick, B. (2003) *A History of Philosophy in America, 1720-2000*. USA: Oxford University Press. ククリック, B. 大蔵諒・入江哲郎・岩下弘史・岸本智典(訳) アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで. 勁草書房.
- Kroeber, A. L., & Kluckhohn, C. (1952) Culture: a critical review of concepts and definitions. *Papers. Peabody Museum of Archaeology & Ethnology, Harvard University*, XLVII, viii, 223.
- 町田健(2018) ソシユールのすべて——言語学でいちばん大切なこと. 研究社.
- 丸山圭三郎(2012) ソシユールを読む. 講談社.
- 中村和夫(1992) ヴィゴツキー理論の展開におけるケーラーの「類人猿の知能研究」の意義. 心理科学, 14, 1, 20-32.
- 中村和夫(1997) ヴィゴツキーの「人間の具体的心理学」の構想について. 心理科学, 19, 2, 12-31.
- 中村和夫(2014) ヴィゴツキー理論の神髄——なぜ文化—歴史的理論なのか. 福村出版.
- 西川長夫(2001) 増補国境の超え方——国民国家論序説. 平凡社.
- 西川長夫ゼミ(1991) 翻訳「文化」という歴史の言葉の歴史. 立命館国際研究, 4-2, 72-142.
- Peirce, C.S., *The Collected Papers of Charles Sanders Peirce*. 8 Vols. Vols. 1-6, ed. Charles Hartshorne

29) 文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意思や葛藤・迷いを含む個別多様な歩みを複数に分かつポイントのこと。

- and Paul Weiss. Vol. 7-8, ed. Artur W. Burks. Cambridge, Mass., 1931-58. 【CP】
- Peirce, C.S., *The Essential Peirce, Volume 2: Selected Philosophical Writings (1893-1913)*, edited by Edition Project, Peirce Edition Peirce, Indiana University Press, 1998. 【EP】
- Peirce, C.S., パース著作集1 現象学(米盛裕二(編訳)(1985) 勁草書房)
- Peirce, C.S., パース著作集2 記号学(内田種臣(編訳)(1986) 勁草書房)
- Rosa, A. (2007) Acts of Psyche: Actuations as synthesis of semiosis and action. In J. Valsiner & A. Rosa (eds.), *The Cambridge handbook of socio-cultural psychology*. NY: Cambridge University Press. 205-237.
- サトウタツヤ (2017) 等至性とは何か——その理念的意義と方法論的意義. 安田裕子・サトウタツヤ(編) TEMでひろがる社会実装——ライフの充実を支援する. 誠信書房, 序章, 1-11.
- サトウタツヤ (2019a) 文化心理学の歴史. 木戸彩恵・サトウタツヤ(編) 文化心理学——理論・各論・方法論. ちとせプレス, 第2章, 15-26.
- サトウタツヤ (2019b) 記号という考え方. 木戸彩恵・サトウタツヤ(編) 文化心理学——理論・各論・方法論. ちとせプレス, 第3章, 27-39.
- サトウタツヤ (2019c) 時間と記号. 木戸彩恵・サトウタツヤ(編) 文化心理学——理論・各論・方法論. ちとせプレス, 第4章, 41-51.
- サトウタツヤ (2019d) 質的研究法を理解する枠組みの提案. サトウタツヤ・春日秀郎・神崎真美(編) 質的研究法マッピング——特徴をつかみ, 活用するために. 新曜社, 序章, 2-8.
- 須藤英幸 (2016) 「記号」と「言語」——アウグスティヌスの聖書解釈学. 京都大学学術出版会.
- Saussure, F. (1916) *Cours de linguistique générale*. Wiesbaden: Harrassowitz. ソシユール, F.・町田健(訳) (2016) 新訳ソシユール一般言語学講義. 研究社.
- 谷徹 (1998) 意識の自然——現象学の可能性を拓く. 勁草書房.
- 田沼正也 (2007) エンジニアのための記号論入門ノート. (2021年2月11日取得 <http://aplysemio.sakura.ne.jp/HP/isej/jise04/pierce.html>).
- 上村佳代子 (2000) 子どもの認識形成への社会文化的アプローチ. 心理学評論, 43, 27-39.
- Valsiner, J. (2001) *Comparative Study of Human Cultural Development*. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.
- Valsiner, J. (2004) The Promoter Sign: Developmental Transformation Within the Structure of Dialogical Self. Paper presented at the Symposium (Hubert Hermans, Convener). Developmental aspects of the dialogical self ISSBD, Gent, July 12, 2004.
- Valsiner, J. (2007) *Culture in Minds and Societies: Foundations of Cultural Psychology*. California: SAGE Publications. ヴァルシナー, J.・サトウタツヤ(監訳) (2013) 新しい文化心理学の構築——〈心と社会〉の中の文化. 新曜社.
- Valsiner, J. (2014) *An invitation to cultural psychology*. Thousand Oaks, CA, US: Sage Publications, Inc.
- Valsiner, J. (2017) *BETWEEN SELF AND SOCIETIES: Creating Psychology in a New Key*.: Tallinn University Press.
- Valsiner, J. (2018) Facing the Future—— Making the Past, Marsico, Giuseppina. *Beyond the Mind: Cultural Dynamics of the Psyche*, Information Age Publishing.
- Valsiner, J. (2019) 「REMAINING ELEGANT: Fifteen years of qualitative psychology in Japan」. 第16回日本質的心理学会講演(明治学院大学).
- 安田裕子 (2015) 分岐点と必須通過点. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編) TEA 理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ. 新曜社, 35-40.
- 安田裕子 (2019) TEA (複線径路等至性アプローチ). サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真美(編) 質的研究法マッピング——特徴をつかみ, 活用するために. 新曜社, 16-22.

(受稿日: 2020. 6. 29)

(受理日: 2021. 10. 21)

Original Article

Consideration of Semiotics in the Trajectory Equifinality Approach with Reference to Peirce, Vygotsky, and Valsiner

MIYASAHITA Taiyo ¹⁾, KAMIKAWA Taeko ²⁾ and SATO Tatsuya ³⁾

(Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University /

The Japan Research Institute, Limited / The Institute for Societal Values in Future Generations ¹⁾/

Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University ²⁾/

College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University ³⁾)

This study contributes to the theoretical development of the trajectory equifinality approach (TEA), a methodology based on cultural psychology, by clarifying what qualifies as a sign in the TEA. This study discusses Augustine and Saussure in the historical context of the concept of sign. In addition, it focuses on the semiotics of Peirce, which had exerted a great influence on Valsiner. Ideas are arranged according to firstness, secondness, and thirdness, which are the bases of Peirce's philosophy, as well as according to the concept of sign, which consists of a triadic relationship among a sign, an object, and the interpreter. This study then examined the semiotic psychology of Vygotsky and the promoter sign of Valsiner and presented a *sign triangular pyramid*, which is a model that explicitly incorporates Kairos time, as a framework for understanding the semiotics of Peirce, Vygotsky, and Valsiner in an integrated manner. The vertex of the sign triangular pyramid is interpretant, that is, it exists within a trilateral relationship (i.e., subject-object-sign). The result suggested that as the basic unit of analysis in this TEA study, the sign triangular pyramid could be a scaffold for approaching the future theoretical challenge of TEA that Valsiner pointed out as a clarification on the teleogenetic zone.

Key Words : TEA, semiotics, Vygotsky triangle, promoter sign, Kairos time, sign triangular pyramid
RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.44, 15-31, 2022.
